

「おたすけ」活動（田原ナチュラルファーム）報告書

1. 活動日 平成 29 年 2 月 16 日(木)
2. 場所 田原ナチュラルファーム(奈良-田原)
3. 参加者
人間文化研究科 生活工学共同専攻・宮里真以
生活環境学部 生活文化学科・中山穂南
文学部・山西悠
4. 活動内容

理系女性教育開発共同機構主催の学生支援事業「おたすけ」の活動として、奈良県田原にある田原ナチュラルファームにて農作業体験に参加。前週の寒波の影響で雪が残る田原にて、午前中は自家製堆肥の袋詰めを行った。近くの精米所から出る粳穀や醤油の搾りかすなどを混ぜながら自然発酵させた堆肥からは、微生物達の運動する熱でもうもうと蒸気が上がり、私達の思う堆肥とは全然違う、とても香ばしい香りがした。この堆肥で育つ野菜はさぞかし美味しいだろうなあ、なんて思いながら、午前中は3人でひたすら堆肥を袋詰めし、発酵(微生物のエネルギー)は本当にすごいと改めて感じる時間だった。

お昼休憩では、自家製のお野菜がたくさん使われたお昼ご飯をご馳走していただいた。普段は生産者さんの顔を見ることなくスーパーで買うお野菜。もちろんそれも美味しいけれど、目の前に作った人がいて、色んな想いを聞きながらいただくご飯は、いつもの何倍も美味しく豊かであった。

午後からは土曜日に田原にある産直市場に卸すキャベツの収穫と袋詰めを行った。また、作業をしながら田原ナチュラルファーム代表の福井佐和さんに自然農を始めるに至った経緯と想いについても伺った。

5. 感想

(1) 田原ナチュラルファームについて

田原ナチュラルファームは、近鉄奈良駅からバスで 30 分ほど揺られた奈良市の東側にある田原の里で自然農法を実践している大和茶畑である。代表の福井佐和さんは、学校を卒業後、大手百貨店で販売職をしながら、休暇を利用しては全国各地で農業体験をし、自然や人、土に触れる楽しさや喜びを感じ、農の魅力にどんどん引き込まれて行ったそう(見せていただいた当時の農業体験の写真の中に、筆者の出身地である沖縄県の離島で農業体験を行った写真も見つけ、嬉しくなる)。その後、勤務先が倒産してしまったことを機に、「やるなら今しかない」と一年間、各地の農家で農業体験をした佐和さんは、奈良に戻り、歌姫農園の研修生として独自の天然自然農法を学び、独立して今に至るそう。佐和さん自身、はじめは自分が農業を仕事にするとは思っておらず、純粋に自然の変化を感じながら身体を動かすことが楽しくて、自然に農業が仕事になっ

ていた感覚だとお話されていた。最近では、女性で農業の道へ進む人も少なくないが、家族や周囲に農業をしている人がいなかった中で、自分の中の「好き」や環境への「違和感」に従い農業の道へ飛び込んでいった佐和さんの生き方と行動力をとてもカッコいいと思う。

田原ナチュラルファームでは、農薬も化学肥料も一切使わずできるだけ自然に近い環境で野菜を育てる自然農法を行っている。自然農法に決まった定義は無く、実践する人によって様々であるが、出来るだけ不耕起、不除草、無農薬で自然の営みや循環に寄り添った持続可能な農法とされている。肥料の主成分は窒素であるが、窒素過多の土では、植物におけるアミノ酸やアミノ酸アミドの含有量が増加しやすくなり、それを好む菌や虫を招き病虫害の原因となる。また、炭水化物がアンモニアとの反応に取られるため、植物の細胞壁が薄くなり、外部からの刺激に弱くなると考えられている。そこで、農薬を使用してほかの生物との競争に負けてしまわないよう他の生物を排除しようとするが、そうすると野菜に栄養分を供給してくれる微生物たちもいなくなり、その結果「痩せた土」といわれるような栄養の少ない土になってしまう。「痩せた土」で作物を育てようと即効性のある化学肥料に頼り、栄養分を補給することになるが、そうすると再び弱い野菜が育って、農薬が必要になる…というような悪循環が、今、多くの圃場で生まれていて、農薬や化学肥料への依存度が高まっているといわれている。そんな中、自然の厳しさも自然の尊さや美しさも愛して、大切にされている佐和さんだからこそ、自然農法で畑をすることになったのはきっと自然なことだったのだろうと納得がいった。しかし、お話を聞く中で、やはり自然農をされている中での大変さや工夫も伺うことが出来た。

(2) 福井佐和さんのお話から考える農業の課題

佐和さんにお話を伺う中で見えてきた農業(自然農法、小規模農家、大和茶農家、女性)の課題と可能性について、自分の考えをまとめる。

① お茶を飲む人が減っている(習慣、家族形態、飲み物の多様化)

近年、海外での緑茶・抹茶ブームや、ペットボトルなどの「緑茶飲料」の普及により、緑茶飲料自体の消費量は増加しているものの、核家族化や、単身世帯の増加など、家族形態やライフスタイルの変化も影響し、若者を中心に急須でお茶を入れる習慣離れが進み、「リーフ茶」の消費は減少しているという。また、斜面で栽培されるお茶は収穫や作業にとっても労力がある一方、低価格化へのニーズは大きく、佐和さんのような小規模茶農家さんの生産は大変さを増す。今回の活動中、何度も佐和さんのお茶を飲む機会があったが、茶葉から淹れるお茶は甘みが強く、まろやかでとても美味しい。珈琲や紅茶など、飲み物が多様化するなか、珈琲を自宅で淹れる人が増えているように、お茶を淹れる文化やリーフ茶の良さ、そしてお茶を飲みながら団らんする時間を大事にしていきたい、伝えていきたい、と強く思った。

② 人手不足→「ゆい」の会・あぐりぶ@奈良女

田原ナチュラルファームは、農作業から、お野菜の配達、イベントなどでの販売まで基本的に代表の福井佐和さんがされている。一人でされていることから、お野菜を配達してほしい、との要望は増えているものの、一人の力では限界があり、今は新規の配達先はとっていない、とのお話を伺った。また、基本的に1年中農作業はあるが、特に春～秋頃の時期、お茶の収穫期などは短期間でしなければならない作業が増えるため、現在は「ゆいの会」という主婦や社会人などを中心に農業ボランティアを募り、対応しているという。仕事帰りや休日などに、農作業を手伝ってもらったり、お野菜を持ち帰ってもらったり、収穫したお野菜でカレーパーティーなどのイベントを開催することで人手を集めると同時に、自然や野菜を身近に感じて楽しんでもらいたい、という佐和さんの想いが込められた会になっている。

今回の活動を機に、農業ボランティアサークルとして「あぐりぶ@奈良女」を発足した。農業体験を中心に「自分の体を造っているものが何かを知る」「交流・人のつながりを広げる」をコンセプトとして今後更に活動を広げていく予定である。

今回の活動では、自然農法で茶畑をされている福井佐和さんに農業を始めるにいたった経緯を伺い、農作業体験として、自家製堆肥の袋詰めや、産直市場で販売するためのキャベツの収穫を行った。自分の中の「好き」や環境への「違和感」に従い農業の道へ飛び込んでいった佐和さんの魅力溢れる生き方を知り、農業体験を通して自然の中で働く楽しさや、日本の農業における課題に気付く事の出来た、とても有意義な時間となった。今回も、快くご協力頂いた田原ナチュラルファームの佐和さんはじめ、田原の皆様、に理系女性教育開発共同機構の皆様にご心より感謝申し上げます。有難うございました。



< 籾殻や野菜の切れ端、醤油の搾りかすなどが混ざって発酵した自家製堆肥 >



堆肥を袋詰め。これだけ全身の筋肉を使う作業は大学に入ってからなかなかないので、なんて健康的で役に立つダイエットだろう、と思う女子大生。



3人で取り掛かればわいわい楽しくこれだけの袋詰めもあっという間に終わってしまった。



休憩に、と佐和さんからの差し入れ。甘いお茶と糖分が身体に染みる～～



畑の側にテントウムシを見つける。テントウムシを見つけるのも久しぶりで嬉しい。



午後からはキャベツの収穫。外側の食べられない葉っぱは取って、そのまま畑に捨てて肥料とする。



自分が持ち帰る用のキャベツを収穫させてもらう。



最近、鳥の被害が多らしく、作業している側にもたくさんの鳥が。天候の影響で小ぶりなキャベツが多かったが、寒さに耐えたキャベツはしっかり甘く、キャベツの特に甘い芯の部分だけをつまんでいく鳥達。せっかく育ったお野菜を食べられるのは悔しいけれど、鳥達は美味しさをよくわかっている…。